



笑いで世を照らす なにわのエジソン

テレビ番組などで「なにわのエジソン」と呼ばれる珍発明家が大阪府八尾市にいる。40歳から余暇を使って趣味と実益を兼ねた発明のアイデアを練ることに夢中となり、これまでの約40年間に浮かんだ発明のアイデアは5千点をくだらない。失敗の連続だが、世の中に笑いを提供するユーモアたっぷりの珍発明を続ける理由は、独自の人生哲学にあった。

(西川博明)

💡日用品アレンジ

元会社員の木原健次さん(81)。この40年間で考えた「5千点はある」という珍発明のアイデアは大学ノートで約100冊分に記されている。

自宅の納屋には、妻の啓子さん(78)が「ガラクタばかりでしょう」と笑い飛ばす試作品約500点が所狭しと並ぶ。100円ショップなどで買った日用品をアレンジした品々だ。

例えば、かぶり物に卓球のラケットがついており、顔や首を動かして卓球をするという「顔面ピンポン」は、他人を笑わせる典型的な珍発明品だ。一方、床に散らばる複数のピンポン玉を一気に拾えるゴムひもつきのかごや、片目だけ覆われた視力検査用メガネなど

唯一商品化された「串抜き皿」を手にする木原健次さん。数々の試作品(手前)のアイデアが商品化に生かされた。大阪府八尾市



はひよっとしたら使えるかも…と思わせる。

当初は企業などに売り込んだが「断りの連続。ボールペン1本が同封された丁寧な断りの手紙もあった」(木原さん)。

💡一獲千金を狙い

けいはんな学研都市で知られる京都府精華町出身の木原さん。農家の次男として生まれ育ち、高校卒業後は大手企業で経理担当の社

員として働いた。そんな木原さんが珍発明にのめりこむきっかけは昭和53年、40歳のときに書店で「発明は誰にでもできる」というテーマの本に出会ったことだった。そこには、主婦が考えた発明が商品化され、一獲千金を得たという実例が記されていた。

「凡人に無縁と思ったが、僕も一獲千金は夢ではない」。影響された木原さんは賞金が出る発明コンテ

珍発明500点役に立たんげど…

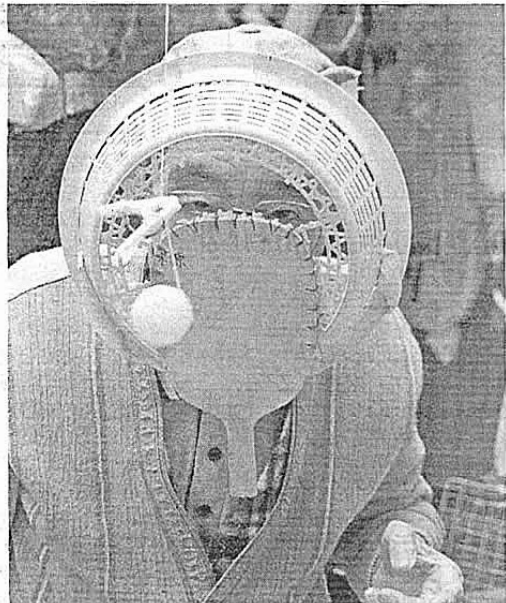
💡「家族に迷惑をかけたという複雑な気持ちでした」
明報が訪れたのは平成20

年、70歳のときだった。プラスチック成形加工業の旭電機化成(大阪市東成区)が手を汚さずに焼き鳥やみたらし団子の串を簡単に抜ける「串抜き皿」(2枚入り、税抜き700円)を発売したのだが、その際に木原さんが考案したプラスチック容器に切れ端を入れる珍発明「ワンカット片」を採用したのだ。

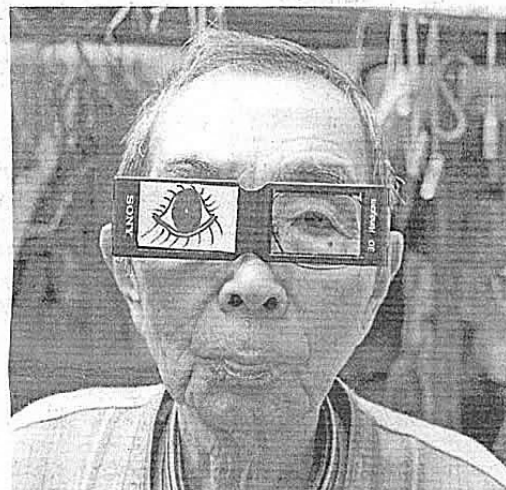
💡アイデア尽きず

木原さんが自身に言い聞かせてきた基本姿勢がある。①頭は使ってもお金は使わない②考える時間は長く、作る時間は短く③欠点のない珍発明はない④遊び心を大切に⑤社会の良俗に反しない⑥5カ条だ。

「珍発明がテレビなどで取り上げてもらえるのは、社会が明るくて平和。それでええのんちやうかと」80歳を超え、体力的な衰えが出てきたと木原さん。ただ、珍発明は「ボケ防止にもなるし、僕の唯一の生きがい」とときどき語り。新たなアイデアを創造する意欲は衰えていない。



顔面ピンポン



視力検査用メガネ



熱い茶碗を触らず出せるお盆



約40年にわたって珍発明のアイデアを記したノートは約100冊に